

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K00744

研究課題名(和文) シティズンシップ意識を育むコミュニティと連携した家庭科におけるキャリア教育の検討

研究課題名(英文) Investigation of Career Education on Home Economics in Cooperation with  
Communities that Foster Citizenship Awareness

研究代表者

志村 結美 (SHIMURA, Yumi)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：00403767

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、シティズンシップ意識を育成することを通して、家庭科におけるキャリア教育の可能性の検討を行うことが目的である。大学生や中学生、中学校の家庭科教員、そして地域での活動をしているボランティア学生、またその地域の住人に対して調査を行い、分析、授業開発等を行った。その結果、キャリア意識やシティズンシップ意識は関連性があり、家庭科の学習意欲とも大きな関連があることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家庭生活や地域社会に根ざした学びを特徴とする家庭科教育は、地域社会の形成者を育成することに大きな役割を果たすことができる。そのような中、家庭科におけるキャリア教育、シティズンシップ教育との有効な実践が期待されている現状ではあるが、しかし、両者の関係性を明らかにした研究は少ない。本研究では、家庭科学習とキャリア教育、シティズンシップ教育との関係性を各種調査から明らかにしたことに学術的意義や社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine the possibility of career education in home economics while fostering awareness of citizenship. We surveyed university students, junior high school students, home economics teachers at junior high schools, volunteer students, and residents in the area, and conducted analysis and class development. As a result, it was clarified that career consciousness and citizenship consciousness are related to each other, and that they are greatly related to home economics learning motivation.

研究分野：家庭科教育学

キーワード：家庭科教育 キャリア教育 シティズンシップ教育

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 日本の子どもたちが抱えるキャリア発達に関する課題(ライフキャリアの視点の重要性)

近年、若者の「学校から社会・職業への移行」や「社会的・職業的自立」を巡る様々な課題が見受けられ、社会問題となっており、教育場面においても、キャリア教育の充実が喫緊の課題として図られている。しかし、日本の子どもたちは、将来就きたい仕事や自分の将来のために学習を行う意識が国際的にみて著しく低く、それに伴い、教科学習に対する興味・関心が低い(TIMSS 調査 2007・PISA 調査 2003,2006)。また、自己肯定感の低さや自分への自信の無さ、さらに、将来的展望を具体的に長期的に持つことができない高校生の実態も研究代表者の過去の研究により明らかとなっている。これらは、キャリア教育が従来、「進路決定の指導」を目的とした進路指導、「専門的な知識・技能の習得」を目的とした職業教育で行われており、「キャリア発達を促す教育」となった現在も、職業生活における自己実現を希求することに重きが置かれていることに問題がある。すなわち、職業、家庭、地域といったライフキャリアの視点からのキャリア教育の実践が希薄なのである。このような現状において、キャリア発達を職業だけでなく、ライフキャリアの視点から生活設計の中で具体的に捉えていく家庭科教育においてこそ、真のキャリア発達を促すことができると考える。明るい将来を自らの力で切り拓いていく力の育成が必要であり、家庭科教育における有効な実践が待たれている状況といえよう。

### (2) 東日本大震災後の児童・生徒等に対する中・長期的な視点にたったキャリア教育の必要性

東日本大震災以降、被災地の児童・生徒に対してはもとより、全国の子どもたちに対して、防災教育や放射能に関する教育等、震災を踏まえた多様な教育がなされている。しかし今後は、自らの今後の生き方を具体的に考える、中・長期的な視点にたった生涯発達を指向した生き方教育、すなわちキャリア教育こそが必要になってくると考えられる。特に震災を経験し、被災地に現在暮らしている、また過去に暮らしていた東北、福島の児童・生徒に対して、これからどのように生きていくのか、具体的に考えていく教育が求められている。その中で、具体的な生活から今後の生き方を考える家庭科教育は大きな役割を果たすことができ、その可能性を探る必要があると考える。すでに研究代表者らは、教員対象調査を実施し、研究に着手している。

### (3) コミュニティ再生の動きとシティズンシップ意識・キャリア意識の育成の関係性

近年の家族機能の弱体化、家族関係の変化により、地域のコミュニティの崩壊が進み、社会的サポートネットワークの脆弱化が社会的に問題視されている。特に、東日本大震災により、被災地でのコミュニティが分断され、支援に問題が生じていることが明らかになってきたことから、地域コミュニティの重要性が見直され、その再生が急がれている状況にある。このような状況において、人と人とのつながりを重視し、コミュニティの中の一員として、活躍することのできる力を培うことが涵養である。コミュニティの一員としての自らを考え、活動していくことにより、シティズンシップ意識が育成され、他者への理解や社会への責任、自己肯定感を実感することができ、キャリア発達を促す上でも重要な体験となると考える。

### (4) コミュニティ再生としての第3の居場所(サードプレイス)づくりへの注目

コミュニティ再生の1つとして、住宅の一部を地域の人へ開放したり、空き住居や店舗などを活用したりした、地域の中での学校でも職場でも家でもない第3の居場所づくり、すなわち「サードプレイス」づくりといったネットワーク再生の取り組みがなされ、一部では成果が認められる。すでに、研究分担者は、大学生と高齢者と連携したサードプレイスの運営を実践しており(伊勢原市愛甲原住宅「CoCo てらす」)、一定の成果を報告している。さらに、「サードプレイス」の設立過程や運営や運営において小・中・高校生もが主体的に関わることにより、自らのまちや地域への愛着や帰属意識を形成し、シティズンシップ意識、さらにはキャリア意識を育成することができると考える。

### (5) 家庭科教育におけるシティズンシップ教育とキャリア教育の重要性

家庭生活や地域社会に根ざした学びを特徴とする家庭科教育は、地域社会の形成者を育成することに大きな役割を果たすことができる。高等学校家庭科学習指導要領(2009)においても、家庭や地域及び社会の一員としてのあり方を考える学習内容が新たに増え、社会とのつながりの重要性が明示されている。一方、キャリア教育は、中教審答申(2011)において、その重要性が謳われている。その後、「基礎的・汎用的能力」が定義され、広く活用されている。家庭科教育においても、高等学校家庭科学習指導要領(2009)において、「生涯の生活設計」が全共通科目で扱う内容とされた。生活設計の中で、職業生活、家庭生活、地域生活の三者のバランスを考え、す

なわち、ライフキャリアの視点から職業生活を捉えていく内容となっている。家庭科におけるシティズンシップ教育とキャリア教育の有効な実践が期待されている現状ではあるが、しかし、両者の関係性を明らかにした研究は少ない状況である。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では、家庭科においてライフキャリアの視点を重視した生涯発達を指向したキャリア教育を検討することが目的である。特にコミュニティと連携し、地域の中での居場所づくりやネットワーク再生の取り組みに児童・生徒が主体的に参加することにより、シティズンシップ意識を育成することを通して、家庭科におけるキャリア教育の可能性の検討を行うことが目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 大学生のキャリア意識・シティズンシップ意識の実態調査を実施した。山梨県内国立大学の1年生を中心にアンケート調査(488名)と、ヒアリング調査(5名)を、2016年10月～12月に実施した。

(2) サードプレイス・地域コミュニティの実態調査として、研究分担者が継続的に大学生とともに活動に参加し、イベントを開催する等の活動を行った神奈川県厚木市愛甲原住宅の住民に対して、「CoCo てらす」に関する調査を行った。実施時期は、平成2017年8月～9月、調査対象は愛甲原住宅内戸建て住宅、配布・回収方法はポスティング・同封の封筒による郵送、回収状況は281枚回収、回収率33.69%であった。

(3) 「CoCo てらし隊」としてボランティアに参加した学生対象にキャリア意識・シティズンシップ意識のアンケート調査を行った。調査対象者は12名、実施時期は平成2018年3月である。

(4) 中学生対象キャリア意識、シティズンシップ意識に関する調査を2018年に、山梨県内の国立・公立2校の中学生929名(男子462名、女子467名)対象に調査を行った。

(5) 中学校の家庭科教員対象に家庭科教育におけるキャリア教育、シティズンシップ教育の調査(アンケート調査、ヒアリング調査)を2019年に実施した。山梨県内公立・私立中学校家庭科教員に対しアンケートを郵送し、50名から回答を得た。(回収率61.7%)

(6) 以上を踏まえ、キャリア教育、ティズンシップ教育に関する中学校・高等学校家庭科の教育カリキュラムの提案を行った。

## 4. 研究の成果

### (1) 大学生のキャリア意識・シティズンシップ意識の実態

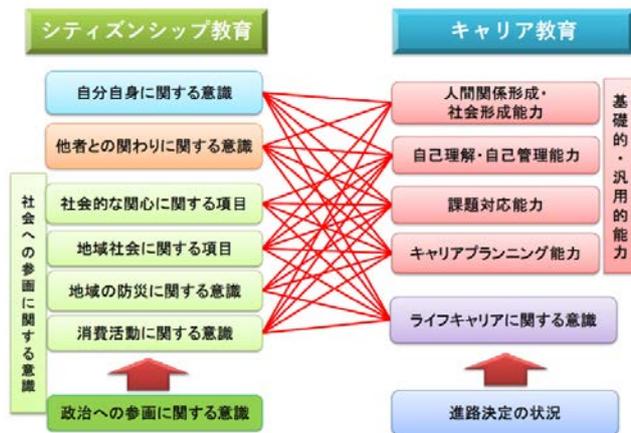
調査項目は経済産業省「シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書」(2006)、石島「高校生の社会参画意識と家庭科の教育要因との関連について」(2012)、文部科学省「高等学校キャリア教育の手引き」(2011)等を参考に作成した。

本調査対象の大学生の社会への参画意識に関しては、社会を創造していくのは自分たちであるという自覚がある学生は男女ともに多いが、新聞やニュースをよく見るようにしている学生が少ないなど、実際の社会には目を向けられていない学生が多かった。選挙に参加している学生は48.2%と約半数であり、日本の同世代の投票率とほぼ同率であった。地域社会に関する項目も、「日本の伝統文化を伝承・創造していきたい」62.3%であるのに対し、地域の行事への参加は47.5%、地域の防災について家族と話し合っている学生は43.5%と実際の行動に移している学生は少なく、認識と行動の乖離が認められた。

キャリア意識では、基礎的・汎用的能力のうち「人間関係形成・社会形成能力」が全体的に肯定的な回答が高く、「自己理解・自己管理能力」は全体的に低かった。学年比較において、学年による相違はあまり認められなかったことから、キャリア意識については、学年が上がり、社会人に近づくにつれて培われていくものもあるが、大学入学以前の学校教育や、家庭環境等によって養われるものが大きいと推察された。

シティズンシップ意識とキャリア意識の関連性に関しては、政治への参画意識が高い学生は、シティズンシップに関する意識(高齢者や障がい者の役に立ちたい、国際的な人権問題に興味がある等々)やキャリア意識(自ら

の将来について具体的な目標をたてている他)、家庭生活の実態(朝食を規則正しく食べている)等、強くその関連性が認められた。



左図は、シティズンシップ意識とキャリア教育の各項目において、60%以上の関連性が認められたものを赤線で引いたものである。

しかし、家庭科学習に関する認識の項目との関連性については、「家庭科の学習は生きていくために必要である」は81.6%等、家庭科の重要性を認識している一方、キャリア教育に関係する「家庭科を学んだことで将来の生き方や進路を積極的に考えるようになった」32.9%、シティズンシップ教育に関連する「家庭科を学び、地域や社会の一員として何ができるか考えるようになった」45.3%と低く、家庭科とキャリア教育、シティズンシップ教育との関係性があると捉えられていないことが明らかとなった。

以上より、家庭科教育への示唆として、

- ①シティズンシップ意識とキャリア意識の関連性が大きく認められ、大学入学以前の学校教育等が重要であることから、「高等学校教育までのシティズンシップ教育・キャリア教育の関連性を重視する」こと
- ②認識と行動の乖離が見られたことから、「認識と行動の乖離をなくすための、実践に繋がる教育」が必要であること
- ③自己肯定感が全体的に低く、特に女性にその傾向が強く表れ、自己肯定感の育成の必要性が認められたことから、「自己肯定感の育成」を重視すること 等が認められた。

## (2) 神奈川県厚木市愛甲原住宅における「CoCo てらす」に関する実態

神奈川県厚木市愛甲原住宅「CoCo てらす」において、研究分担者が継続的に大学生とともに活動に参加し、イベントを開催する等の活動を行った。具体的には、学生ボランティアを中心に「CoCo てらし隊」を結成し、「CoCo てらす」の歌やダンスを作成したり、手作りベンチを贈呈したり、地域の活動に積極的に参加したり等々、積極的に活動を行った。

### ① 神奈川県厚木市愛甲原住宅の生活環境とコミュニティに関する実態(住民の「CoCo てらす」に関する認識)

学生のボランティアグループ「CoCo てらし隊」の活動に対して、住人の6割以上が認知をしており、各種イベントに住民が参加をし、その活動の成果が地域に認められる状況になっていた。また、その活動に対して肯定的に捉えており、若い学生が地域の活動に積極的に参加していることに対して、今後継続して行って欲しいと考えていることがわかった。これらの調査結果に関しては、2018年3月に愛甲原住宅内のイベントにおいて、報告を行った。

### ② 「CoCo てらし隊」としてボランティアに参加した学生・卒業生のキャリア意識・シティズンシップ意識の実態

ボランティア活動を通して学生は、活動そのものを楽しんでおり、高齢者等、異世代との触れ合いを通して、思いやりの気持ちが高まったり、他者から感謝されて喜びを感じたりしていた。また、この活動を通して身に付いた能力として、主体的に自ら進んで活動する力、目標達成に向けて解決すべき問題を見つける力、目標を達成するために他者に働きかけてともに行動する力、情報収集・選択能力、コミュニケーション能力、そして、学校での学びや体験を自分の生活や周りの人たちとの仕事と結びつけて考える力等あげられた。また、いろいろな世代がいる地域の人たちとの交流が大変ではあったが、学ぶことが多く、現在の仕事や大学での学びに役立っているこ

とが述べられた。以上、大学生が実践を通しながら、キャリア意識やシティズンシップ意識を高めている現状が推察された。

### (3) 中学生のキャリア意識・シティズンシップ意識の実態

本調査における中学生のキャリア意識は、大学生と同様、基礎的・汎用的能力のうち「人間関係形成・社会形成能力」が全体的に肯定的な回答が高く、「自己理解・自己管理能力」は全体的に低い結果となった。また、シティズンシップ意識にも関連する「将来子供が生まれても仕事を続けたい」、「将来社会に貢献し、人の役に立つ存在になりたい」といった意識が約 9 割と高いことが明らかとなった。同様に、「地域の人とお祭りやスポーツで関わりたい」、「自分の暮らす地域が好きだ」といった地域に対する肯定的な認識も高く持っていたが、学年が上がるにつれて下がる傾向が見られた。また、大学生と同様に、自己肯定感・有用感の低さが認められ、特に女子が低かった。

また、キャリア意識やシティズンシップ意識は、家庭科の学習意欲との関係性が高いことが明らかとなった。将来的な展望意識や他者との関わりが家庭科の学習意欲と大きな関係があり、家庭科において、実践的・体験的な学びが有効ではないかと推察された。

### (4) 中学校の家庭科教員の家庭科教育におけるキャリア教育とシティズンシップ教育の実態

家庭科の授業において、キャリア教育やシティズンシップ教育を実施している教員は両者ともに 2 割等であり、実践はあまりなされていなかった。しかし、家庭科の授業で「将来的展望」について取り扱うことの重要性について全員が「重要・やや重要」と回答している等、キャリア教育やシティズンシップ教育の重要性は感じている教員が多いことが明らかになった。また、キャリア教育やシティズンシップ教育を意識して実践してはいないが、地域との関連や防災、消費者市民としての消費者の役割、将来の生き方等、キャリア教育やシティズンシップ教育に関する授業実践は、ほとんどの教員が実践していることが明らかとなった。また、ヒアリング調査からは、家族や地域の一員として協力・協働しながら、自分が「できた」経験を自信や、自己肯定感を持たせる授業実践などが、生徒の家庭科への学習意欲を高めるのに有効である等の意見が得られた。

### (5) キャリア教育、シティズンシップ教育に関する家庭科の教育カリキュラムの提案

キャリア教育やシティズンシップ教育の視点を生かした家庭科の学習意欲を高める授業のキーワードとして、キャリア教育の基礎的・汎用的能力を基本として、A:人間関係形成・社会形成能力(①他者の気持ちを受け止め、自分の考えを伝える力、②社会に参画する力③協力・協働する力)、B:自己理解・自己管理能力(④物事に粘り強く継続的に取り組む力、⑤自己肯定感)、C:課題対応能力(⑥情報を収集する力、⑦課題を発見、計画、実行する力)、D:キャリアプランニング能力(⑧現在の学びと将来とのつながりを考える力、⑨将来を展望し目標を立てる力)を設定した。

以上を取り入れ、中学校や高等学校家庭科における学習指導計画と授業指導案を作成した。年間指導計画と学習指導案にはそれぞれ、本研究で明らかになったキーワードを取り入れ、授業で高められる力を明記した。また、授業については、各々3年間の見通しを持って学習に取り組めるよう、はじめのガイダンスでキーワードを示し生徒と共有し、毎回の授業の終わりに自己評価ができるようにワークシートを工夫した。今後は、教育カリキュラムの実践と検証を行っている予定である。

### <引用文献>

- 経済産業省. (2006). シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会. 20-24  
中央教育審議会答申. (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について  
石島恵美子. (2012). 高校生の社会参画意識と家庭科の教育要因との関連について日本家庭科教育学会誌, 55(2), 75-82  
文部科学省(2011). 高等学校キャリア教育の手引き, 74-75

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 志村結美・佐藤典子・大橋寿美子	4. 巻 1巻25号
2. 論文標題 家庭科におけるキャリア教育の可能性の検討 被災地の高等学校家庭科教員対象調査結果から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 133-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 渡邊綾馨・志村結美
2. 発表標題 中学校家庭科における学習意欲を高める授業の検討
3. 学会等名 日本家庭科教育学会例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤安純・志村結美
2. 発表標題 家庭科におけるシティズシップ教育とキャリア教育の検討
3. 学会等名 日本家庭科教育学会例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 丹采風・志村結美
2. 発表標題 家庭科におけるキャリア教育の授業開発
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2016年度例会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	大橋 寿美子  (OHASHI Sumiko)  (40418984)	大妻女子大学・社会情報学部・教授    (32604)	